

ふれあるき

■ 楽曲データ

歌詞：観月浩道 作詞

楽曲：中田喜直 作曲

発表：浄土真宗本願寺派 1952年

初演：—

初出：『BUKKYO SANKA』 仏教讃歌刊行普及會 1952年

管理番号：M1288

■ 創作の経緯

詳細不明。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：『BUKKYO SANKA』 仏教讃歌刊行普及會 1952年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

寒くなり、「報恩講」の季節が巡ってくると、ご生涯をかけて私たちにお念仏のみ教えを伝えてくださった親鸞聖人のことが偲ばれます。

「報恩講」とは、親鸞聖人のご命日を縁として、そのご恩に報いるための法要で、浄土真宗本願寺派では、新暦の1月16日をご命日として勤められます。真宗門徒にとっては、1年でもっとも大切な法要です。

《ふれあるき》は、門徒（家庭）報恩講をテーマとする仏教讃歌です。本山の報恩講にお参りするために、先に取り越して（繰り上げて）お寺や門信徒の家庭でお勤めするので、地域によっては「お取り越し」と呼ばれます。飛騨古川（岐阜県）の「三寺参り」など、かつては報恩講を中心とする真宗文化が地域に根付いていました。時代は変わっても、報恩講は地域ぐるみで大切に勤めたいものです。

◆ 作詞者・作曲者について

作詞の観月浩道（1911～1993）は、大分県別府市の円正寺副住職を務めていました。仏教讃歌では、《そんなときわたしはくちずさむ》の詞も手掛けています。

作曲の中田喜直（1923～2000）は本願寺と縁が深く、《幼児のおつとめ》《ありがとう》などを作曲しています。日本童謡協会の会長として、7月1日を「童謡の日」とさだめ、楽譜集『日本の童謡200選』を編むなど童謡の振興に努めました。この《ふれあるき》も、わらべうた風の商品です。

◆詞について

歌詞は方言を交えながら、報恩講の情景をいきいきと描いています。ちなみに歌詞に登場する「ケンチャン」は、報恩講のお齋にだされる「けんちゃん汁」のことです。

◆曲・歌い方について

- ①冒頭に、「元気よく」という曲想の指示があります。いきいきとしたリズム感をもって歌いましょう。
- ②息継ぎは、楽譜に指定された位置を正確に守った方が、歌が生きてくると思います。
- ③4小節目の「まいり」は、少しスタッカート気味に歌うといいでしょう。
- ④6～8小節目は、息継ぎをしないで一気に歌ってください。
- ⑤9～12小節目は、ピアノ伴奏のリズムに乗って、明るく元気に歌いましょう。
- ⑥11小節目からは、「みんな」に呼びかけるように。
- ⑦13小節目の全音符は長さを十分に保ちましょう。
- ⑧14小節目の歌いだしはピアノ（弱く）です。少し声をひそめて始め、だんだん大きくしていきましょう。
- ⑨17小節目も、4小節と同じように、軽くスタッカート気味に歌いましょう。

◆用途・音源

放送設備などなかった頃、ご近所に報恩講や法事の案内などをふれて回るのは、子どもたちの役目でした。そのようなことを子どもさんやお孫さんと話しながら、一緒に歌ってみてください。子ども報恩講では、ぜひ歌っていただきたいものです。

音源は、CD『仏教讃歌一歌集』に収録されています（カラオケ付）。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 53（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第180号収録）を加筆・修正のうえ、転載。